

輓近に於ける東洋史學の進歩 (下)

文學士 羽 田 亨

三 西域諸國の人種

今の支那領トルキスタンの地にトルコ人の分布するより以前に、主として如何なる人種が住んで居たかといふことは、歷史上極めて重大なる問題で、また甚だ興味のある問題である、従がつて從來種々の推論が試みられたが、此等諸國の中少く

更に吾人は此の斷定と暗示とを基にして、獨り西域諸國のみならず、古來の大疑問たる漢民族の起原、漢民族の文化等問題についても、相當強い根據から從來よりも更に進んだ推論を試み得る時代に達して居ると考へる。

四 諸宗奧の發見

支那や中央亞細亞に行はれた宗教の經典で、從來殆んど、若くは全く知られなかつたものゝ發見されたことは、またその文化史上の大事件である、經典の種類より區別すれば、佛教基督教摩尼教經典の三種に分れ、その國語よりすれば前述のソグド・龜茲及び焉耆・于闐・回鶻・西夏と漢文との六種も、また有力なる暗示を提供したものであるが、

支那や中央亞細亞に行はれた宗教の經典で、從來殆んど、若くは全く知られなかつたものゝ發見されたことは、またその文化史上の大事件である、經典の種類より區別すれば、佛教基督教摩尼教經典の三種に分れ、その國語よりすれば前述のソグド・龜茲及び焉耆・于闐・回鶻・西夏と漢文との六種

しく此の地方に旅行して見聞を書き付けた書物の中に、他の宗典については兎も角、少くとも佛典丈けについても此等諸種の翻譯に關して詳細の有様を傳へて居ないのは、誠に不可思議の次第と言はなければならぬ。

此等の宗典の中、數に於て最も多く發見せられて居るのは佛典であつた、就中漢文のもの最も多く、西夏文回鶻文のものが之に次いで居る、その他の三種の國語で書いたものは、今日迄に發表せられて居るものからいへば上の三者に及ばないやうである、併しながらこれは既に發表せられたもの、若くは自分の見聞したものに就いていふのであつて、實際歐洲各國に蒐集せられて居る各種の經典が、如何なる數量に上つて居るかは明らかには分らない、上述三種の印歐語の佛典も決して少からぬであろうが、研究の困難の爲に今尙ほ發表されないものが多いと信する、従つて此の有様は勿論

各種佛典の分布の多少を示すものではない、殊に西夏文の佛典の如く一所に集まつて完全に保存せられて居つたものもあり、また今も埋没の状態にあり、或は既に湮滅に歸したものが少からぬとだから、從來發表されたものが曾て存在したものに對して數量の上から如何なる部分に當るかは全く不明である。さて此等の佛典について如何なる研究が出来て居るかは門外漢の自分には分らないが大体の傾向は曾て榑博士が譯述せられたペリオ氏の「イラン語族の民衆が中央亞細亞並に極東の地に及ぼせる影響」(藝文大正元年第八月號)といふ平易な講述を見れば窺知し得られると思ふ、ただ自分の如き學問の立場にあるものから見て、甚だ興味のある事實と思ふのは、此等の佛典の研究によつて、從來梵語から譯せられたもの、若しくは系統の曖昧であるとせられた佛語の類が、往々此等西域諸國の語であることに氣の付くことである、

仮へば沙門なる語が龜茲語の Samāne で梵語の Sramana でなく、沙彌が龜茲語の Samir で梵語の Śramaṇa でなかつたり、出家が龜茲語 Ost meñ ladhe 即ち「家から出る」との意譯、外道が同語の parnañhe 即ち「外にある」の意譯であつたり (Lévi, Le Tocharien B. J. A. 1913. p. 313) 瑠璃・壁瑠璃が梵語の vaidurya プラクリットの verūḍa よりも、ソグド語の virūḍya であらうと思はれたり (Pelliot. Un fragment du suvarṇaprabhāsūtra. 1913. p. 26) するが如きである、此等西域諸國の僅少の言語の支那に翻譯さたて居るのを據にして、直ちに兩者の佛教上の關係如何を求めんとするのは危険であらうが、之を佛教の東方傳播史上の事實と併せ考へるならば、支那佛教研究上重要な資料と成り得ると思ふ、自分はかゝる問題には觸れ得ないが、しかもかゝる問題を別にしても、從來知り得なかつた西域諸國の文化が、少くとも或

る影響を東方に及ぼして居るものであることを知り得るに於て、多大の興味を感ずるのである、これについては更に五の項に於て述べる。

基督教の經典はソグド語ウイグル語中期波斯語のものど外に漢文のものが見出されたが、ともに數の上からは僅かに止るやうである、これについても宗教學の立場から如何なる研究が施されて居るかは知らないが、歴史上の問題としては極めて曖昧の間に葬られて居つた西域諸國の基督教傳播史の上に、強い根據を與へたものである、殊にペリオ氏に依つて敦煌から發見せられた漢文の經典、景教三威蒙度讚及び尊經は、短かいものではあるが唐代に於ける此の教の流行の名殘として、かの景教碑の記事及び數種の書記の上に有力なる證左を與ふるものである、前者は聖三位に對する讚で、後者は有名な景教僧景淨の譯出した三十餘種の經名を擧げたものである、これに關する詳細

なる研究はまだ公やけにされないと思ふが、一部分のことは河内の Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême Orient, VIII, p. 519 及び Journal Asiatique, 1913. jan.-juin. p. 134 に見えて居る、但しこの遺經は同じ場所から出て我が京都富岡氏の所藏に歸した同教典一神論(藝文第七年一月號參照)の爲に、稍々その聲價を下けた譯であるが、ともかく唐代以後初めて發見せられた景教經典である。

マニ經典なるものもまた殆んど知られなかつたものであるが、これも中期波斯文、ソグド文、回鶻文及び漢文等各種の翻譯が得られた、從來此の經典は、専らシリヤ語で行はれたものと信せられて居つたのであるが、今日ではかゝる實際上の證據に依つて、その誤であつたことが證明せられた譯である、此の宗教は教祖マニの磔刑と共に波斯本國には禁止せられ、その後解禁せられたことはあつたが要するに一時的の現象で、遂に波斯には

亡びてしまひ、僅かに東西に逃れた教徒に依つて、外國に命脈を保つに過ぎなかつた、回鶻人が此の教の熱心な信徒に成つたことは有名な次第であるが、それも佛教回教の信仰の爲に漸次衰微し、その經典も失はれて、本來のマニ教とは如何なるものであつたかも明らかには分らず、僅かに基督敎史の中に傳へらるゝ所に依つて、その大體を推測し得るに過ぎなかつた、然るに此の如く諸國語に翻譯せられた重要な經典が見出されたので、今日では大概その真相を知り得るに至り、ゾロアスター敎基督敎佛敎等との關係についても、ほぼ推知し得るに至つた、此等の經典中漢文に譯出せられて存するものゝ一つ、即ち曾て羅振玉氏が波斯敎殘經の名に依つて出版したものは、シャワンヌ、ペリオの兩敎授が一九一二年及び翌年の Journal Asiatique に於て細かに研究して發表して居るし、中期波斯語で書いた重なるものは、獨逸のミュー

ラー教授が一九〇四年に Handschriften Reste in Estrangelo-Schrift aus Turfan を題して出版して居る、その他回鶻文のもの、または上述各國語で記した斷卷の一々の研究についてはこゝには省略する、但し短篇ではあるが、若しその所論にして正鴻を失はざれば極めて重要な性質を帯びて居るものは、一九〇九年に獨逸のル・コック (LeCock) 氏の發表した Ein christliches und ein manichaisches Manuscriptfragment in türkischer Sprache aus Turfan の中に收めた一篇である、これはマニ經典ではなく、却つて全文皆佛典であつて、しかも有名な釋迦の四門遊觀を記したものである、然るにル・コック氏は之を以てマニ經典中に佛典を引用したものと斷片であると定めて、これに依つても佛敎がマニ敎中に重要な位置を占めて居るものなることを證明し得るといふて居る、若し此の考が正しいならば、マニ敎の敎義を研究する上から甚だ

重要で且つ興味のあること、言はなければならぬ、然らば何故に氏は此の回鶻文の佛典の斷片をマニ經典の斷片だと定めたかといふと、これは其の經に加へた句讀點の形式が、マニ經典特有のものであるといふこと及び、新疆から發見せらるゝ佛典は、皆卷子が貝葉の形か或は摺本に成つて居るのに、この斷片は西洋風の綴本であるといふ外形上の根據と、また同一の書に屬する他の斷片に、マニ敎に關する文句が見えて居るといふ内部的證據とに依るのである、此の外形上の證據の中、句讀點形式に依て立てた議論の取るに足らざることについては、曾て自分は明らかな實例を示して證明して置いた(東洋學報第五卷第四十九頁、綴本の形になつた佛典も西域考古圖譜回鶻文佛典(3)に依つてその實例を示し得るのみならず、スタイン氏の蒐集の中にも存する、されば若し氏の論ずる所にして支へらるゝならば、一にその内部的證明

に據るものであらねばならぬ、自分は伯林の蒐集品を見ないから強くは言ひ得ないが、氏の示す所丈けでは所謂同一書の他の断片なる言葉に安心して従ひ得ない様にも思はれる、氏は同一人の書であるといふことを強い根據にして、數個の断片の同一書に屬することを主張して居るけれども、それ丈けの理由ではかゝる断定は下し難いかと思ふ、然も若し果して氏の主張が正鴻であるならば、これは佛教マニ教の間に於る深い關係を證明するものとして、極めて重要な研究と認めねばならぬ。

五 ソグド文化の東方に

及ぼせる影響

厦門地方の曆書に日曜を密と稱するのは解し難いといふことが、一七八一年ドウグラス氏(C. Douglas)によつて Notes and queries on China and Japan 誌上に論せられ、その後ユーベ氏(Huber)もまた福建地方の曆書に同様の名が存することを述

べ且つ之を解釋した(Bulletin del' Ecole Française d'Extreme-Orient, VI)此の間この問題は多くの學者の注意を惹いたのであつたが、その次第はペリオ氏の Un traite' manichéen retrouvé en Chin. J. A. 1913. Jan.-Fev. p.162-165に譲つて置く、ウィリー氏(Wylie)は一八七一年 On the Knowledge of a Weekly Sabbath in China なる論文を Chinese Recorder に掲げて、洪潮和曾孫堂燕通書便覽に同様に日曜日の密と記されることを示し、殊にまた乾隆四年編纂の飲定協紀辨方書に七曜の名を記し、之に日曜の事をまた密と記して居ることを注意した、此の協紀辨方書にはウイリ氏の抄出した所よりも詳しき記載がありて、此の名はもと宿曜經に見ゆと記し、また回鶻では日曜を密、波斯では曜森勿、印度では阿爾底耶といふと記してある(Pelliot, *ibid.* p. 163)、今直接宿曜經について七曜の名の記されて居るものを求めて見ると、

これは回鶻としてではなく胡名として、

密莫漢 雲臣勿歇浣
鵞那積

曜曜曜曜曜曜曜
日月火水木金土

と見て居る、金俱叱譯の七曜攘災決及び宋史律
曆志(四)には鶻勿斯が喞沒斯、那歇が那頡、枳浣
が鷄緩となり、また宋史には喞が滴となつて居る
が、もとより同音の異譯に過ぎぬ、さて密を初め
此等の七曜名については、從來學者は皆之を波斯
語と認めたのであつたが、一九〇七年にミューラ
ー氏は Die „persischen Kalen derausd. heke in
chinesischen Tripitaka“なる一篇を普魯西學士院の
報告に出して、新疆出土のマニ教徒の用ゐた曆を
紹介し、これによつて此等の七曜名が波斯語では
なくしてソグド語であることを明らかにした、此
の曆は一葉が三行に區劃せられて居るが、左行に

ソグド語の七曜名を記し、これに對應して中行に
支那十干を配し、右行に亞細亞諸國に廣く行はれ
た十二支を配したものである。さてそのソグド語
の七曜名を見ると

mīc
mākh
wunkhān
tīr
wur.nazt
kēwān
曜曜曜曜曜曜曜
月火水木金土

と記されて居る、これを上の宿曜經以下の書に見
て居る所と比較すれば、所謂胡名なるものは一
見して此のソグド語の忠實なる音譯であるとか明
らかであつて、支那の佛典や曆書中にソグド地方
の曆法の一部が記されて居ることを知り得ると共
に、ソグド語の日曜日の名は今も尙ほ福建地方に
行はるゝものであるとを了り得らるゝに至つた。
次には寒北の地にソグド文化の入り込む跡を

尋ねると、彼の回鶻文字なるものが實にソグド文字から發達したものであり、従がつて蒙古滿洲字の如きも間接に此の文字から發達したものであると見得る如きは、これか好個の一例證とするに足る、此の事については既に大正三年史學會大會の講演中の一部に述べ、その筆記は同年五月の史學雜誌に見えて居るから重ねては説かぬ、尤もこれについてはラドロフ博士は別に意見を有して居つて、一九一〇年にソグド字は反つてウイグル字から發達したものであらうといふ見解を發表して居るが (Kudatku Bilik, Teil II, p. 551. not.)、此の如きは到底成立せぬ議論であつて、佛蘭西のゴーチオ氏 (R. Gauthiot) の如きも De l'alphabet sogdien の中に、之を以て甚だ信す可らざる意見だとして居る。

漢史には夙く漢代から西域地方の史實に關連して賈客とか商胡とかいふ文字が屢々見えて居る、

今記臆して居る所で古い時代のものは、後漢書斑超傳に超が焉耆を攻めた時に、龜茲于闐等の兵と外に賈客千四百人を發したことが記されて居る如きである、この文字丈けに依つては此等の商人が何れの國人であるかは固より知り得べきでないか、併しソグド地方には古くより商業を以て生業としたものが多く住んで居たもので、彼のサルトなる民族の名稱も實に商人の意に外ならぬと思はれるのであるから (東洋學報第五卷第三九七頁拙稿回鶻文法華經普門品の斷片注(1)參照)、此等の賈客といふもの、中には必らずソグド地方商人を指して居る場合が甚だ多いことと思ふ、スタイン氏が羅布泊^{プロブ}より敦煌に通ずる古道の衛堡の廢墟から見出したソグド語の文書は、ゴーチオ氏の研究によれば紀元一世紀に作られたものと認めらるるのであるが、七世紀八世紀時代に彼等の作製した文書もまた此の地方から發見せられて居る (藝

文大正元年第八號第十四頁―第十五頁參照)、勿論彼等の商業上の目的地の重なるものは支那であつたから、その交通の間には文化の上になつても種々の影響を之に及ぼして居るべきこと想像に餘りある、しかし今は此の問題に入つて自説を述べべきではない。

六 回鶻文化の東漸

支那領トルキスタン地方に回教の行はるゝに至つたのは、カラ汗家成はイレク汗家と稱し、多くの學者がウイグル種と認め、少數の人はカルルク種と認むる王朝の勢力に據るので、此の家の可汗の一人が、九六〇年頃に初めてその部下を率ゐて回教に歸依したものだといはれて居る、此のカラ汗家の都は初めは今の露領セミレチエンスク州の南なる吹河畔カシュのベラサゲンであつたが、後にその宗家はカシユガルを都とし、一〇六五年から一〇二年の間には有名なボグラ汗が出て、彼のク

ダック・ピリクといふウイグル語の回教道德書も、此の可汗に捧げられたものである、しかも當時回教文化が一般に如何なる程度に於て此の地方に行はれて居たかについては、殆んど何等知り得る材料無く、ラドロフ博士がクダックピリクの翻譯に於て(第二卷五五四頁)十一世紀に於てはアラビア文字はたゞカシユガルの僅かの住民に通じたものであると斷じたのも、確かなる根據に依つて主張したものでは無かつた、然るに一九一四年に巴里のコレージュ・ド・フランスの教授ウアール氏(Huart)は同年の Journal Asiatique Nov.-Dec. 號に Trois actes notariés arabes de Yarkend と題して、ペリオ氏將來の中亞文書の中、ヤルカンドから出た一〇九六年、即ち前記ボグラ汗在世中の一年に相當する日附けを有する土地賣買文書を解説した、これについて氏の言ふ所に依ると、當時ヤルガンドでは、凡そ不動産の賣買はイスラム教徒

の判官の面前に於て爲され、判官は充分にアラビア語に通ずる人であり、證印を押す前に證書のアラビア文をトルコ語に翻譯して關係者に讀み聞かせ、また證人はアラビア字で署名するを常としたが、時には以前より行はれたウイグル字をも用ゐた例もあることが知れるとのことである、即ち當時アラビア文化は宗教を先頭にして漸次ヤルカンド地方にも行はれ、土人はほゞその文字を解し、

證書の体裁の如きも、初めに「慈悲寛大なる神の名に於て」なる回教徒の間に定りたる文句を使用して居たものである、但し余輩はかゝる文化がヤルカンド地方の全部を支配したかどうかについては、尙ほ考ふべき餘地があり、恐らくその一部分に止まつたもの、換言すれば回教の信仰がまだ此の地方の全部には行き亘るには至らなかつたらうと思ふが、それにしてもカシユガルのボグラ汗の勢力の下に在つたカシユガル、ヤルカンド、コー

タン地方には、從來學者の想像したよりも遙かに盛な勢で回教文化の行はれて居たものであることを知り得るに充分であらう、但し此の形勢を以て、支那領トルキスタンの東北部地方に迄及ぼすことは、いふ迄もなく不當である、高昌を中心とした地方のウイグル人は尙ほ佛教マニ教を奉じ、同種族ながら回教を奉じたカシユガル地方のものに取つては、信仰上の仇敵であつた。

七 結 尾

前數項に述べた外、更にかゝる方針の下に論述し紹介すべき事項は決して少々ではない、美術史風俗史歴史地理上の研究等、數へ來れば逸す可らざるもの甚だ多い、更に中亞發見の史料によつて、支那の歴史的事實の闡明せられたものも少くない、此等を一々こゝに略述するが爲に紙面の割讓を請ふことが不可能ではないにしても、それは此の一篇に於る當面の目的ではない、たゞ上に述べ

た所によつて、東洋史殊に塞外地方の歴史の研究に從事して居るものが、輒近主として如何なる方面に努力し、その學問の趨勢が如何なる方向を取つて居るかの一斑を窺ひ得れば足るのである、漢史を研究し、これに依て支那以外の東洋諸國の史蹟を探る外に、新たに得られたる、若しくは得らるべき此等諸國の史料の研究によつて、從來の

知識の上に一步を進めやうとして居るに外ならぬ、従つてこれが研究者に取つては缺く可らざる第一の武器は言語の知識であつて、これ無くば殆んど如上の大勢に伴ふて研究の歩を進めることは不可能なるのみならず、折角漢史に記されて居ることを正しく解釋することもまた覺束ないと言はなければならぬ。

雜纂

考古學の葉 (第二回)

文學士 濱田耕作

第二章 資料

一、遺物と遺跡

一四、考古學の資料 狹義の史學が主として文書

記錄等文字によりて記されたる内容を資料として研究するに對し、考古學は人類の殘したる物質的遺物 (material remains) を其の研究の材料とする